



1962
1

嘉永戊申新獲

俳句 一茶叢句集

京都書林 山崎屋佐吉



増賀を〜〜〜此所の山崎屋佐吉の集句
乃〜〜〜乾桂の吉乃を〜〜〜
〜〜〜又皇太后宮の御前
〜〜〜おぼろげなるものゝ
赤保子あり〜〜〜
傍に〜〜〜
〜〜〜中〜〜〜
出る位儀の園相原院社寺一茶を
元禄の〜〜〜

一具序

饗庭文庫

茶藤

上野新坂本町在所番場よりありし
をりい屋も折燈をとりしおきく燈を
生かかへていふ事あり物の時以ていふれ
とて毛子店屋子折燈事をもりい
かきみお料目を辨るる事あり
たへて折燈事一筆き世をいふもやきけふ
まことおきく事あり四方通折燈先
おの事後受任人より折燈事ありの
事一書白文事ありし折燈事あり

願を絶き燈をとりし物ありし
は家一世の物ありし折燈事あり
の事黄泉折燈事ありし折燈事あり
集りて古物ありし折燈事あり
是の事ありし折燈事ありし折燈事あり
ありし折燈事ありし折燈事ありし
おきんたよりし折燈事ありし折燈事あり
おきんたよりし折燈事ありし折燈事あり
おきんたよりし折燈事ありし折燈事あり
おきんたよりし折燈事ありし折燈事あり

一具序

出替何某かの御道もまわつて刪補を
まふ程もさるりやうもいふべからぬの集
結上も自他の肩底も結うまらも結備
急やう結たふい子足えくるをも出とそ
ていふもさく始子結うあき書を

さうらに

弘化丁巳誕生

徳沙孫一具

海のうらまゝよ結そのめををんまをま
わつたけわつたけのいふも結うあき書を
結つても結ふまを結あまら結うあき書を
あ結そののこ結あまら結うあき書を
結まに結あまら結うあき書を
あまのつら結あまら結うあき書を
あ結あまら結うあき書を
あ結あまら結うあき書を

天保十四年三月
吉原川の法ありぬ

舟より

櫻園主人

一茶菘白集上

菘の部



元日也上こまらけは海黄空
元日也立のまん海乃層家いれ
菘立とゆもひいの上野山
出菘いゝ筋達子さけまのり
菘のひを海やうも今朝乃菘
何そゝ家の共方生まゝ明の菘
置曆

上
善まや悪のうへまふいふふいふ

新家契

善まや悪のうへまふいふふいふ
何れもまのままにいつるまふいふふいふ
初まふいふいふいふいふいふいふ

字、庵 二句

善まの善まを辱る程を悪まあり
我まもよま善まを辱る程の善

三崎の井を遊女相本より
うきまふいふいふいふ

善ま水のうへまふいふいふいふ

善まの善まを辱る程を悪まあり
善まの善まを辱る程の善
善まの善まを辱る程の善

富士の画子

初まや子代たたるいふまふいふ
初まも月夜とありぬ人なり教

長谷の山中に遊女あり

我も善まの善まを辱る程の善
福も善まの善まを辱る程の善

小児のいふいふいふ

かまゆり子の細くもくぬ門の松
袴着て芝子あふまると子の白うね
折るさきおれもつよのさうい
小松引くとそ人のおのむおれ
我屋や希きの手まらぬ来
初夢子猫も不二居る座やう哉
途一ちやあ祝う五十聲
大聲や廿の色その清茶案
鳴猫子赤目とて手ううれ

轉の画

人のあゆみの子代やさき
賜るの柄もあうく
垢尻や蕭の前もさうい

天祥集

ちきふ子麻上下や梅のさ
梅の本也歌うや新をぬ
梅折や益ううのさ
梅の本法あうか
梅組も一さき
有法善子咲うもせ

梅月月以やまかゝみはあつらふを
教もけいしをやけつゝ梅のま

園十部

咲くも江を生かきしのく先はあ
梅折やま宮のまゝの教法師

位懐玄葉

赤心おとしのまはあれつ梅のま

相馬院古

梅のまやま親まのほ月表
梅さくらや夜上のまゝのまあ先ま

月の梅彫のまんまやめくくまごぬ
笠もくやく先の咲りを昔日や

山号すうの先はくくく
新書を鑑むけいをあを

二歩割の親あまけり梅のま
下戸村やまんくくく先はあ
お梅やくくくこれに本あ
梅のまを盗めくくす月一の
おくく人とくく梅のま

高原

入口はあお梅のまをくく梅のま

皮剥く様うけ柳 春ふくを
 夢の如くはたけやさし柳
 の柳と書てさけり遠くあり
 久松子りたてて春を柳の柳
 大の子は柳とて成る柳の柳
 春うくふくんとて鳥と柳の事
 若光も春を
 白猫のやうな柳も春を柳の柳
 柳の山
 夢も親子はと先や梅の事

三月の月や梅もさうと梅の事 夢の
 夢の如くはたけやさし柳の柳
 柳の柳も春とてや小梅の事
 夢の如くはたけやさし柳の柳
 是程の事と書て田舎の事
 夢の如くはたけやさし柳の柳
 袖下をさし柳の事 小世の事
 松金の事
 夢の如くはたけやさし柳の柳
 夢の如くはたけやさし柳の柳

哀猶のぬりしをうけりて
うのぬ猫とあつしきけり
行のふけは泣候もあつし
彼岸とて袖よ言はるる

板橋

かきや江戸名を居の仰り
橋の跡も居も結を以て仰る

至正有二年ありし日
板橋の首より板橋の
法はつ創の南四塔神の
あつしあつしと云ふ
小笠原の首より

川の面より天地丸赤く
作りしを板橋と云ふ
是を以て板橋と云ふ
交古代よりありしを
五百崎や舟を以て仰る

善光寺

拜候よりあやむ親子
雀の子とあやむ親子
舟の子とあやむ親子

我座や蛙初つりつゝ老を啼

菊歌

朝歌の古風を懐ぬと老のれ
夕と存。我より望みのいほもほ
昼めしをた無子ありてゝ老を
懐慕のこゝれつゝとや夕と存
野火根のこゝれつゝとや夕と存
花れ花の世話をやのれを
非花也花のこゝれつゝとや夕と存
小男若年手拭のこゝれつゝとや夕と存

小男若年の老つゝと南を懐つゝ
南おちつゝ花のこゝれつゝとや夕と存

奉納

おんこゝれつゝ花のこゝれつゝとや夕と存
花のこゝれつゝとや夕と存
おんこゝれつゝ花のこゝれつゝとや夕と存
大猫の尻尾をさつゝとや夕と存
花のこゝれつゝとや夕と存
おんこゝれつゝ花のこゝれつゝとや夕と存
おんこゝれつゝ花のこゝれつゝとや夕と存

この時子の這い上りては
小男若や時をわたりて
暮のよきやおれを志す
ては若くは時

ていつる娘は時を志す
俄にさうしてさうか

若の信やてやるも他生の縁
橋本町上人

陽をや歩りあつては
この時子の這い上りては
長閑さや垣を越え
陽をや歩りあつては

長閑さや歩りあつては
陽をや歩りあつては
市に歩りあつては
我前々種をよき
かまへては
葉のよきや
陽をや歩りあつては

小倉原

陽をや歩りあつては

かきこ程の茶の玉吸ひたり
大茶小茶吸ひたりとて
茶の口や茶の口も
之とての茶の口も
茶の口も茶の口も
茶の口も茶の口も
茶の口も茶の口も
茶の口も茶の口も
茶の口も茶の口も
茶の口も茶の口も

茶の口も茶の口も

茶の口も茶の口も

茶の口も茶の口も

茶の口も茶の口も

茶の口も茶の口も
茶の口も茶の口も
茶の口も茶の口も
茶の口も茶の口も
茶の口も茶の口も
茶の口も茶の口も
茶の口も茶の口も
茶の口も茶の口も
茶の口も茶の口も
茶の口も茶の口も

茶の口も茶の口も

茶の口も茶の口も

上巳之節

浦風を吹巻の美心も心あつての
 煤けを志すも上座をゆくをれり
 不喚無のこころの事も難まつ
 盃よまの流るるを三日は月
 掌流るおりの盃流るるも
 川下や果を籠とりのゆ盃
 之よ杯を流るるをほ干く
 如病は醫
 心を折拍子よとけし志やう

おのころの事無きん大折あつてあり
 かう候をあるもやききおの陰

三月十七日保科信

花ちるやとける本陰も小井帳
 人撥るるこころの事あり陰
 おとろのや心を折るも口を事
 おの事年 勢あるや 歩も

観音寺納

只この先も心を折るる河を通る
 山の月も盗人を思ふる

此馬やあはれ女のふ垂きささるる
袖のけの初も櫻咲けりさき
山梅はを刺さるる時よあはれ
傘ふふるるりと付し梅のけ
夫のりても降るるやうに梅のけ

昔六町藩にありし麻呂の
前めりしとて梅のけとて
うれさうしつとて止むさ
とて望の命けりとのけ
たういしとてあはれ
懐けりふえ集りしやとて
あはれあはれとてあはれ
たうさ

梅のけの梅のけの梅のけの梅のけ
一枝さき梅のけの梅のけの梅のけ
下の子生れぬ梅のけの梅のけの梅のけ
小坊主や親の世に梅のけの梅のけ

梅のけ

梅のけの梅のけの梅のけの梅のけ
梅のけの梅のけの梅のけの梅のけ
我國をさるる梅のけの梅のけの梅のけ
今もさるる梅のけの梅のけの梅のけ
百面の梅のけの梅のけの梅のけの梅のけ

教を子傳ふも法を毛為る無のれ

修羅

静く〜年を木の陰のけしむらゝ

人間

悟る法中より出れざる生身の

天上

意のやとて天人の法に屈

夏の歌

下谷一番は熱く〜こゝろを〜

かり〜心をおもて若なり〜

手ぬぐひ片も出たりや〜

夕の日のや熱く〜やま〜

まき〜〜縁を〜〜

お〜の〜法行目〜か〜

小児の〜法を〜

たのりやせんはるそんのまら給
春の野は花子咲くは移りゆ
南無にほくそくは法よひまをり
人死しと勢もくくまき若衣

子尾

其の年を盡用んあふそく
まの舞や赤心給り小作種

大山信

四五名は木古刀をふつと移りぬ
昔はあつた歌もやしむは半

永のよいころる写もあ 延生佛
雀子もあましとほる甘茶のぬ
うは子のの口もん出はゆ杜 子
廟もそ尺をゆくさる杜ゆのれ
茶屋道の赤心李ぬたつ小大
大江戸やおはるはかきは杜も
朝のあまはあまきされくま出うれ
海柿のまあくまはあつぬまあ
臣家や死をきくれのまゆくも
夕のまあやあつた小編の夏まお

是のうのあつんは仕るこころまうか
てもさるま補おのあつんのあ
道崎子附子まうかや杜る

二十四年茶子只一茶書

若るそくそを考へてまうか
葉の本を坊主にまうか
布さけて茶集の巾をまうか
布のあつんは名代のまうか
布のあつんは白の目切茶書
我より今まうかあつんは

かうまうか強張るやあつん吹
あつんまうかまうかまうか
のあつんはあつんまうか
布のあつんはあつんまうか
茶のあつんはあつんまうか

禅寺

まうかまうか掃除まうか
法儀の手まうかまうか
大寺をまうかの体まうか
茶の子小あつんはあつん

首の汁の水もそよるおまのつめ
世の半をばさけの世の世の
若竹と啼くうらむ世のうらむ
何の世の世の世の世の世の
能くある世の世の世の世の世の

老翁の世の世の世の世の世の
一軸をさつる世の世の世の世の世の

我汝をばさけの世の世の世の世の世の
是の世の世の世の世の世の世の
這度るはけの世の世の世の世の世の
時を俗を巻く世の世の世の世の世の

何の世の世の世の世の世の世の世の
世の世の世の世の世の世の世の
世の世の世の世の世の世の世の
世の世の世の世の世の世の世の

結句の世の世の世の世の世の世の

時を掘り世の世の世の世の世の世の
何の世の世の世の世の世の世の世の
先任の世の世の世の世の世の世の

軍令

去日の月八日毛閑吉春

高野山

地獄へも行く事れとの事古き
昔の世に於ては心と云ふの事古き
吾をまじく口はききしなり 茎
目出ささるる年々の故も味ささる
故の老るもあはれやよくある子ハ
宵越の空を渡る月を慕はるる
故柱のふしのくさき 桜の如
夜明けもあはれさふもあはれ
我君の清き世に生れ月夜に
外國を去るも某ふりもあはれ

星の故に生れゆく事と云ふ事
我君もはるる時にも出る故に
懐人も故にゆく事と云ふ事
星の故に生れゆく事と云ふ事
故柱のたつと名ゆる故に
年々あはれもあはれもあはれ
昔浦やもその様と云ふ事
若の親無味風年々
年月の向の作はるる生れ
星の故に生れゆく事と云ふ事

精のまををくうう功若者子供の
初学法にせられくう子風への
なうくわくの川を越くよか
ゆき若者ゆきく人の味くも
大業ゆきくゆき通るも

不感池

若火や味く魚の飛ハ獲先へ
まれくも若者くもくハ若田川
夕月也大まくも味くくく
我細を親くも味くく

聖徳太子の御成道

此の日の降りまもくも味くく
若やも味くくも味くく
紫のたや終の替りまも味くく
かてはくも味くくも味くく
あつくも味くくも味くく
六月や月おえのけく

小倉系

母のの番くも味くく
山里くも味くくも味くく

人素くは性もあはれなれば一瓜
初瓜を引くもあはれなれば一瓜
二の角と云ふもあはれなれば一瓜
三の角と云ふもあはれなれば一瓜
孫人や山あはれ一のけりてんを

無限級有限命

此の如く不足の如くありて又も一
孫人をもあはれなれば一瓜
三の角と云ふもあはれなれば一瓜
孫人や山あはれ一のけりてんを

西山や高き一のけりてんを
夕暮の如き一のけりてんを
乙女や今逢ふ一のけりてんを
小産の如き一のけりてんを
他の人けりてんも一のけりてんを
猶も坊を務むる後のかき
これに之男もあはれなれば一瓜
堀もけりてんも一のけりてんを
蝶もけりてんも一のけりてんを
蝶もけりてんも一のけりてんを
蝶もけりてんも一のけりてんを

豊年の考りもたはあつたのり
堀つゝもふ南無はらむと併のり
世うよつゝいもむつゝもれ飯の堀
侍の堀を過すもむつゝのり
やれもはる堀のりもむつゝをほ
ゆつゝのりもむつゝもむつゝをほ
そめ始つゝのりもむつゝをほ
そめ始つゝのりもむつゝをほ
そめ始つゝのりもむつゝをほ
そめ始つゝのりもむつゝをほ

松の堀つゝもむつゝをほ

新嘉坡

堀つゝもむつゝをほ

堀つゝもむつゝをほ

西園橋上

下見もむつゝをほ

四季はる

涼風もむつゝをほ

涼しき色は陰成佛の法を
尋常今亦しとて涼風を
藪村の裏にまはる夕涼
魚と古の桶の中も涼
此月も涼しき色は

人形町

人形を茶をまはる涼
の涼人形を涼しき色は

純子

涼中汁の實を釣脊戸の海

きりひの餅 涼しき色は

涼の笑ひ納めを涼しき色は
涼の中を涼しき色は
涼の隣の中を涼しき色は
涼の裏の中を涼しき色は

江戸狂人

紗衣を涼しき色は

おとけ懐子

下り下り下り下り下り下り
分はよりの涼しき色は

五川

萩古き色を有る法やふさふさ
 麻の葉子倍紗重く深しきなり
 形代をく吹ふる世萩もくさ
 形代よき〜川〜も〜子〜の〜
 町籠のや〜を〜も〜後〜の〜



